松江市文化財調査報告書 第69集

文化財愛護
シンボルマーク

—団原排水路改良工事に伴う—

四王寺跡発掘調査報告書

1996年3月

松 江 市 教 育 委 員 会
財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書　第69集

文化財愛護
シンボルマーク

―団原排水路改良工事に伴う―

四王寺跡発掘調査報告書

1996年3月

松　江　市　教　育　委　員　会

財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

1．本書は平成7年度において財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した団原排水路改良工事にかかる四王寺跡発掘調査の報告書である。

2．本発掘調査は松江市建設部土木課から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。

3．調査の組織は下記の通りである。

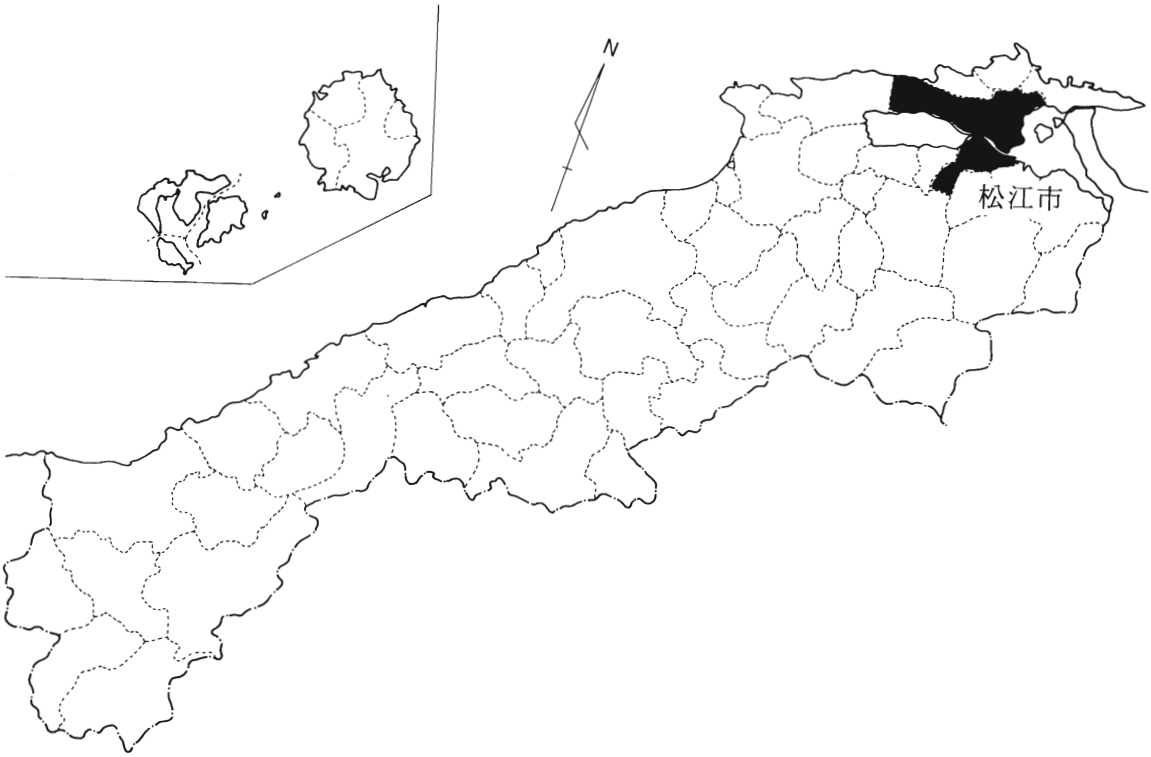
依頼者　松江市建設部土木課
主体者　松江市教育委員会
事務局　教育長　諏訪　秀富
生涯学習部長　伊藤　博之
文化課長　中林　俊　（平成7年6月まで）
柳原　知朗　（平成7年7月から）
文化財係長　岡崎雄二郎
同係主事　飯塚　康行
実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団
理事長　大塚　雄史
事務局長　佐藤千代光
埋蔵文化財課
調査係長　中尾　秀信
調査者　調査担当者　金山　正樹
調査員　曽田　辰雄

4．調査の実施に当たっては、次の方々の指導と協力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。
広江耕史（島根県教育庁文化財課　文化財保護主事）、中村唯史（島根大学大学院生）（敬称略）

5．本書で使用した遺跡の地形図及び遺構の実測図の方位は磁北を示す。

6．出土遺物は松江市教育委員会文化課で保管している。

7．遺物の実測、浄書及び写真撮影は金山・曽田が、拓本は荻野哲二（松江市教育委員会）、執筆・編集は曽田が行い金山がこれを助けた。



第１図　島根県地図

第２図　四王寺跡位置図

目　　次

１．調査に至る経緯……4

２．遺跡の位置と歴史的環境……4

３．四王寺跡について……6

４．調査の概要……9

〈１〉土層の堆積状況と遺物出土状況……9

〈２〉杭列について……9

〈３〉石列について……13

〈４〉出土遺物について……13

①　須恵器・土師質土器　……13

②　陶磁器　……15

③　瓦　……16

５．結　　び……20

1．調査に至る経緯

四王寺跡は松江市街地東南、茶臼山山麓にある寺院跡である。周辺一帯は、近年宅地開発が進んでおり、排水路の整備が急務となったため、松江市建設部土木課では平成5年度において団原排水路改良工事を計画した。

しかし工事区域は四王寺跡の西側に隣接しており、遺跡の範囲が本区域まで及ぶことが推定されたため、平成7年度において発掘調査を実施することとなった。

現地調査は平成7年7月10日から8月2日まで合計24日を要して実施した。

2．遺跡の位置と歴史的環境

四王寺跡(1)は、松江市街地南東の茶臼山南麓に所在する。本調査区は松江市山代町247–33番地先水路で、山代町字師（四）王寺の西端にあたり、標高20 m に位置している。このあたりは『出雲国風土記』に「神名備野」と称されている茶臼山南麓の舌状に張り出した地形で、県道八重垣神社竹矢線が東西に通っている。南東側には、八束郡八雲村より中海へと注ぐ意宇川によって形成された意宇平野が広がっており、周辺では古墳時代の遺跡をはじめ多くの遺跡が知られている。

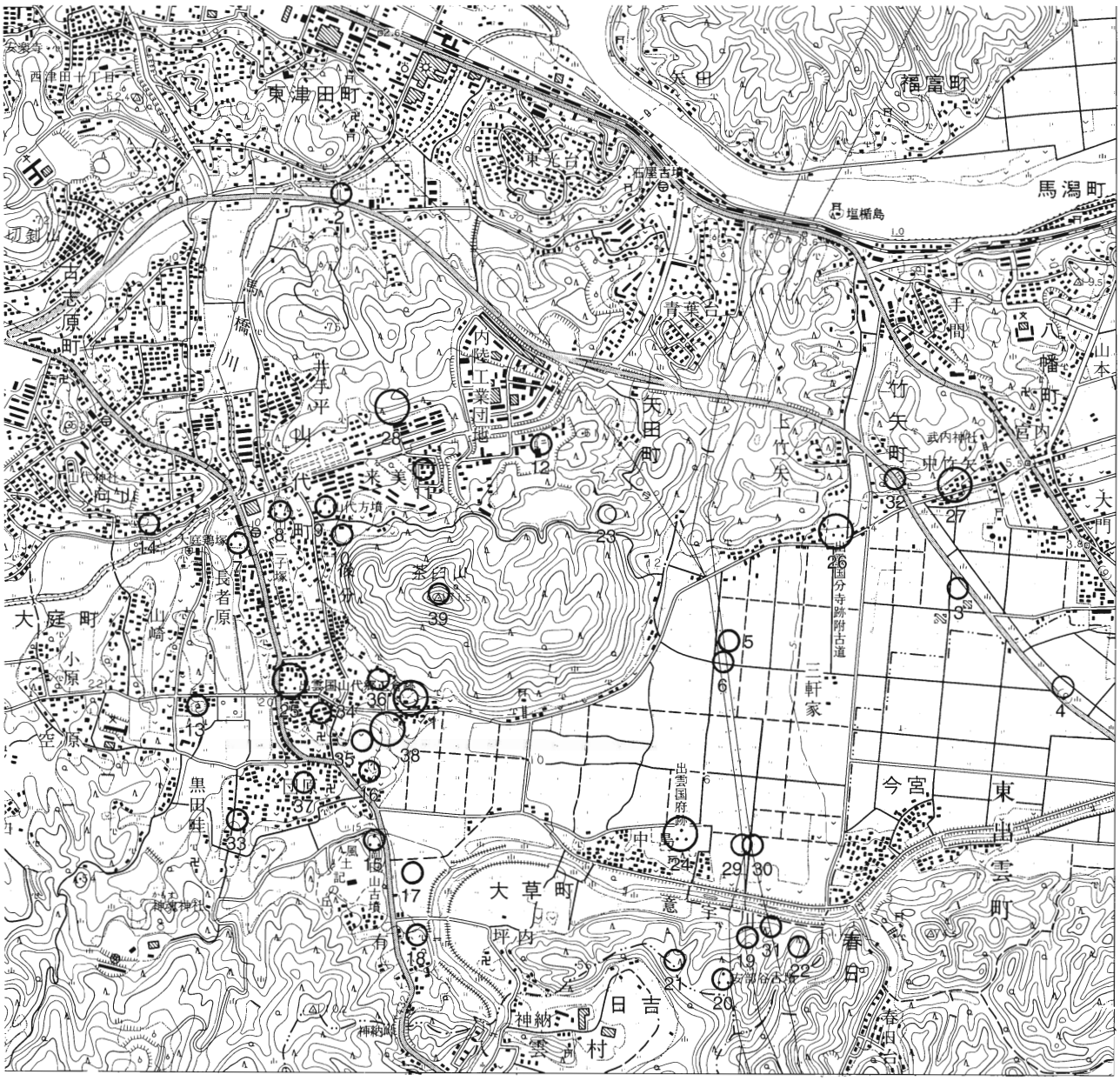
主な遺跡を概観してみると、縄文時代の遺跡として茶臼山北方に石台遺跡(2)があり、縄文後・晩期の土器が採集されている。

弥生時代の遺跡は、管玉の未製品が出土した布田遺跡(3)、後期の水田跡が検出された夫敷遺跡(4)、上小紋遺跡(5)、向小紋遺跡(6)などが知られている。

古墳時代に入ると、出雲を代表する古墳が多く造られる。茶臼山北西麓の大庭鶏塚(7)、山代二子塚(8)、山代方墳(9)、永久宅後古墳(10)、狐谷横穴群(11)、十王免横穴群(12)、東淵寺古墳(13)等がある。また、西方には石棺式石室をもつ向山1号墳(14)が存在する。南方丘陵上には、円頭太刀に「額田部臣…」の銘文が発見され注目された岡田山1号墳(15)をはじめとして、団原古墳(16)、岩屋後古墳(17)、御崎山古墳(18)等が分布している。意宇平野の南側丘陵には、古天神古墳(19)、東百塚山古墳群(20)、西百塚山古墳群(21)、安部谷横穴群(22)などが分布している。北側丘陵には廻田古墳(23)などが知られている。

奈良時代に入ると意宇平野に国庁が設置され、周辺地域が政治、文化の重要な地として位置付けられていたことが窺われる。『出雲国風土記』によれば、出雲国庁(24)の他に意宇郡家、意宇軍団、駅、山代郷正倉(25)などが設置されていたことが分かる。平野北部の丘陵裾では出雲国分寺跡(26)、出雲国分尼寺跡(27)が知られている。また、山代郷内にあった2ヵ所の新造院について四王寺跡と共にそのうちの一ヵ所といわれている来美廃寺跡(28)が茶臼山北麓に存在する。

中世の遺跡は、意宇平野の南辺に大屋敷遺跡(29)、才垣谷遺跡(30)、天満谷遺跡(31)、北辺に中竹矢遺跡(32)、西端に出雲国造館跡(33)などがある。茶臼山の西南麓には、黒田館跡(34)、小無田遺跡(35)、市場遺跡(36)などが分布し、黒田畦遺跡(37)からは中世～戦国末期頃の建物や柵列のほか、土壙墓から



1. 四王寺跡　2. 石台遺跡　3. 布田遺跡　4. 夫敷遺跡　5. 上小紋遺跡　6. 向小紋遺跡　7. 大庭鶏塚古墳　8. 山代二子塚古墳　9. 山代方墳　10. 永久宅後古墳　11. 狐谷横穴群　12. 十王免横穴群　13. 東淵寺古墳　14. 向山1号墳　15. 岡田山1号墳　16. 団原古墳　17. 岩屋後古墳　18. 御崎山古墳　19. 古天神古墳　20. 東百塚古墳群　21. 西百塚古墳群　22. 安部谷横穴群　23. 廻田遺跡　24. 出雲国庁跡　25. 山代郷正倉跡　26. 出雲国分寺跡　27. 出雲国分尼寺跡　28. 来美廃寺跡　29. 大屋敷遺跡　30. 才垣谷古墳　31. 天満谷古墳　32. 中竹矢遺跡　33. 出雲国造館跡　34. 黒田館跡　35. 小無田遺跡　36. 市場遺跡　37. 黒田畦遺跡　38. 寺の前遺跡　39. 茶臼山城跡

第3図　周辺の主要遺跡

多量の無文銭が出土している。また、本調査区と隣接している寺の前遺跡(38)では12世紀頃の貿易陶磁器が出土している。茶臼山山頂には城跡(39)がある。

参考文献　(1)島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ｘ　1994年
－島根県松江市山代町所在・山代郷南新造院（四王寺）跡－
(2)松江市教育委員会『寺の前遺跡発掘調査報告書』　1995年

３．四王寺跡について

島根県松江市山代町字師（四）王寺を中心とした地域は、古瓦が採集されることや「師（四）王寺」という地名のあることなどから古代寺院跡の存在するところとして早くから注目されていた。

天和3年(1683)に著された「出雲国風土記抄」から現代に至るまで多くの研究者は、四王寺跡が「出雲国風土記」所載の山代郷内の新造院の一つにあたると推定している。また、昭和43年から45年にかけて松江市大草町六所神社周辺の発掘調査により、このあたりが国庁として確定的になっており、六所神社周辺からの方向・里程を考えると出雲臣弟山建立の新造院は四王寺跡にあてるのが妥当であると考えられている。

山代郷南新造院跡（四王寺跡）の調査は、これまでに島根県教育委員会によって昭和59年度、62年度、平成5年度の三度にわたって行われている。

昭和62年度の発掘調査においては、昭和59年度に検出された地山加工段が方形台状基壇であることが確認されている。平成5年度の発掘調査においては基壇上に5間×4間程度の礎石建物が存在し、その年代は出土した瓦（四王寺Ⅱ類軒平瓦）から考えて8世紀中頃を遡らないと考えられている。また、昭和62年度の第Ⅴ調査区の瓦溜では、新造院創建期の瓦と考えられている軒丸Ⅰ類、軒丸0類に限って出土している。

寺院跡に関係する遺構の広がりとしては、8世紀前半代に基壇の北側に新造院が創建され、8世紀中頃に基壇上に新しい礎石建物が建立されたと考えられている。平成5年度の調査区が新造院の東端にあたると考えられるが、8世紀中頃以降に何処にどの程度の伽藍が存在していたのか、また、南西方向へはどの程度寺院関係の遺構が存在するのかは不明である。

平成6年度に松江市教育委員会で調査を行った「寺の前遺跡」は山代町字師（四）王寺の南西隣接地に所在し、県道八重垣神社竹矢線をはさんで本調査区の南側に位置する。調査の結果、四王寺に関係する遺構は検出されず、寺域外であることが確認された。

今回の調査は島根県教育委員会の三度にわたる調査区と比べて最も西端に位置し、四王寺跡に関係する遺構の存在の有無を確認すると共に、寺域範囲の把握を目的として行ったものである。

参考文献　(3)島根県教育委員会　『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅴ』　1988年
－島根県松江市山代町所在・四王寺跡－
(4)島根県教育委員会　『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ｘ』　1994年
－島根県松江市山代町所在・山代郷南新造院（四王寺）跡－
(5)松江市教育委員会　『寺の前遺跡発掘調査報告書』　1995年

第４図　発掘調査区周辺地形図

＊註　島根県教育委員会「風土記の丘地内発掘調査報告Ｘ」1994年
第４図を引用

4．調査の概要

調査の結果、杭列・石列が確認された。杭列は立杭5本、横木1本であった。石列は安山岩を主としていた。表土以下黒色粘質土層までの包含層（砂礫層）より、須恵器・土師質土器・近世陶磁器・古瓦や近現代の陶磁器・瓦などが出土している。

なお調査区内は幅1 m、道路を挟んで長さ南北約38 m の水路のため作業工程上、調査区を道路より北側をA区、南側をB区として2ヵ所に分けて調査を行った。（第5図）

〈1〉土層の堆積状況と遺物出土状況（第6・7図）

(A区)

調査区北側の長さ16 m の範囲である。

土層堆積状況は、上から大まかに茶色粘質土層、黒灰色粘質土層（礫混入）、緑色砂礫層、黒色粘質土層に分けられる。茶色粘質土層と黒灰色粘質土層（礫混入）及び緑色砂礫層の一部上層からは、近現代の瓦・陶磁器が出土した。また、黒灰色粘質土層（礫混入）下層及び緑色砂礫層の一部下層からは須恵器・古瓦・陶磁器・土師質土器が出土した。包含層の黒灰色粘質土層（礫混入）は厚さ約20～30㎝を測り、緑色砂礫層は厚さ最大で約60㎝を測る。出土した古瓦の内、四王寺Ⅰ類軒丸瓦が1点確認された。厚さ1 m 以上を測る黒色粘質土層からは遺物が出土しなかった。黒色粘質土層は研磨された砂を含んでおり、火山灰ではなく地表で土壌化したものだと考えられる。

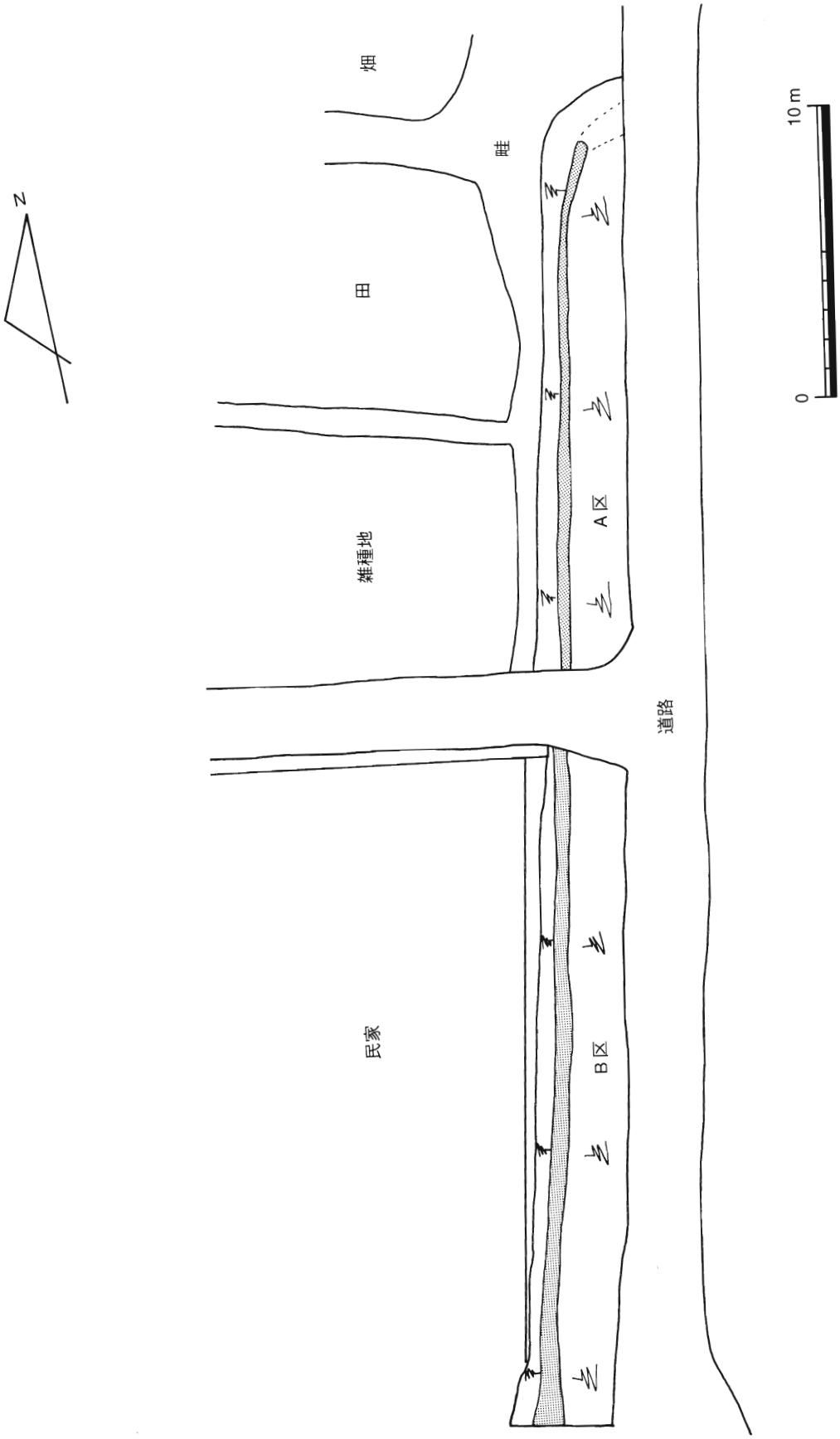
(B区)

調査区南側の長さ19 m の範囲である。

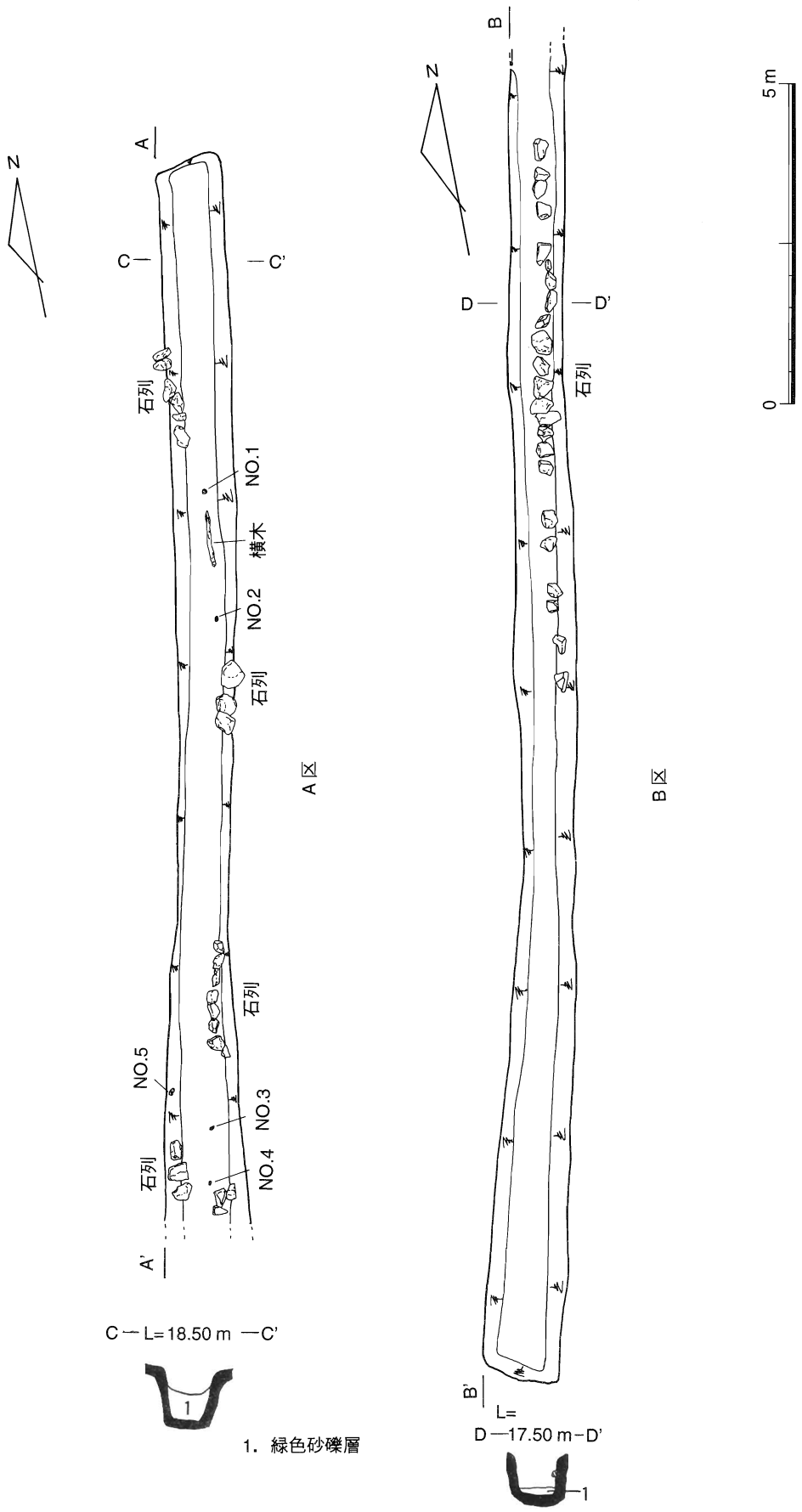
土層堆積状況は、上から大まかに茶色粘質土層、黒灰色粘質土層（礫混入）、緑色砂礫層、黒色粘質土層が確認された。調査B区西側では以前に池が存在しており、宅地造成のために土が盛られているため埋土と思われる明茶褐色粘質土層が一部で確認された。遺物包含層はA区と同じく黒灰色粘質土層（礫混入）と緑色砂礫層であった。それぞれ約20㎝の厚さを測り、黒灰色粘質土層（礫混入）からは近現代の瓦・陶磁器が出土し、下層からは古瓦・須恵器・近世陶磁器が出土した。黒色粘質土層からは遺物が出土しなかった。

〈2〉杭列について（第6・7図）

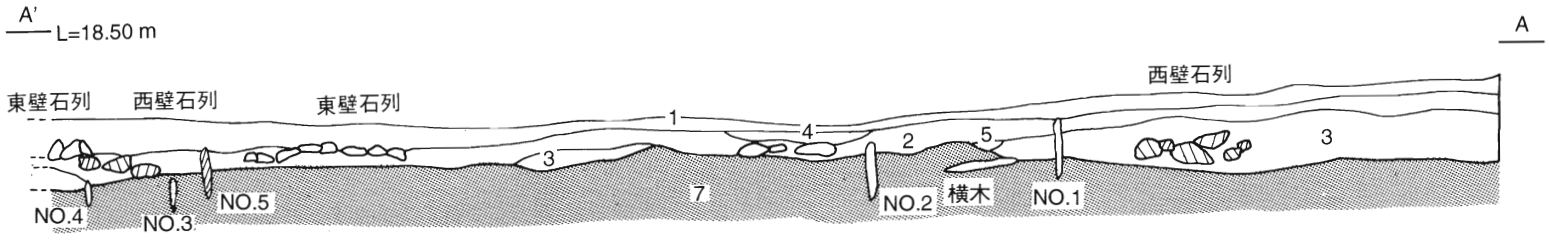
杭列が検出されたのはA区のみであった。杭列は立杭と横木で、立杭は調査区東側に4本、西側に1本、横木は東側の立杭の間に1本確認された。立杭は丸木で直径7㎝前後を測り、長さ約25～70㎝を測る。杭の上部は残存状態があまり良くなく欠損しているものもあったが、下部の先端は全て先を削って尖らせており、砂礫層より黒灰色粘質土層に打ち込まれていた。東側の4本の杭を上流側から No.1～



第５図　四王寺跡調査前測量図

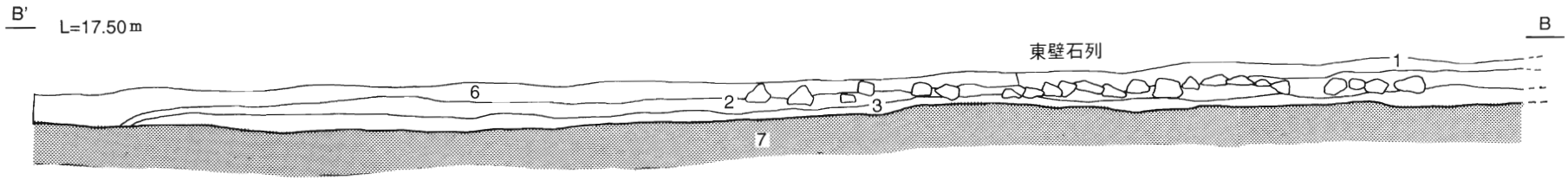


第 6 図　四王寺跡調査成果図



A 区

※斜線のない石列・杭列はセクションに投影したもの



B 区

1. 茶色粘質土　2. 黒灰色粘質土（礫混入）　3. 緑色砂礫　4. 茶色砂質土
5. 緑色粘質土　6. 明茶褐色粘質土（埋土）　7. 黒色粘質土

0　5 m

第7図　土層堆積状況

No.4、西側の杭をNo.5とすると、それぞれの間隔がNo.1～No.2が約2.0 m、No.2～No.3が約8.0 m、No.3～No.4が約0.8 mあり距離間隔は一定しないが、ほぼ一直線上に配している。西側の立杭No.5と東側の立杭(No.1～No.4)の並びとの最短距離は約65㎝であった。横木は長さ約90㎝を測り、立杭No.1～No.2の間の緑色砂礫層下面で検出された。

杭列を検出した位置が東側と西側のそれぞれで石列と比較的近い位置であることや東側の杭と石列はほぼ同じ並びになることから考えて、お互いに関連する可能性がある。

〈3〉石列について（第6・7図）

A区においては、黒灰色粘質土層（礫混入）中に人頭大の石を使用した石列が東側に3ヵ所、西側に2ヵ所、計23個検出された。それぞれ約1.5 m～2.5 mの距離を測る。石列の中にはレンガが混入しており、明治以降の石列である可能性が高い。石材は安山岩及び硅質岩であった。

B区においても溝中東側に一列となって人頭大の石が23個確認された。A区と同じく黒灰色粘質土層（礫混入）より検出された。長さは約9 mである。石材は安山岩であった。A区下流側の石列の方向はN−10°−EでありB区の石列とほぼ方位が重なるため、共に関連したものであると考えられる。

〈4〉出土遺物について

① 須恵器・土師質土器

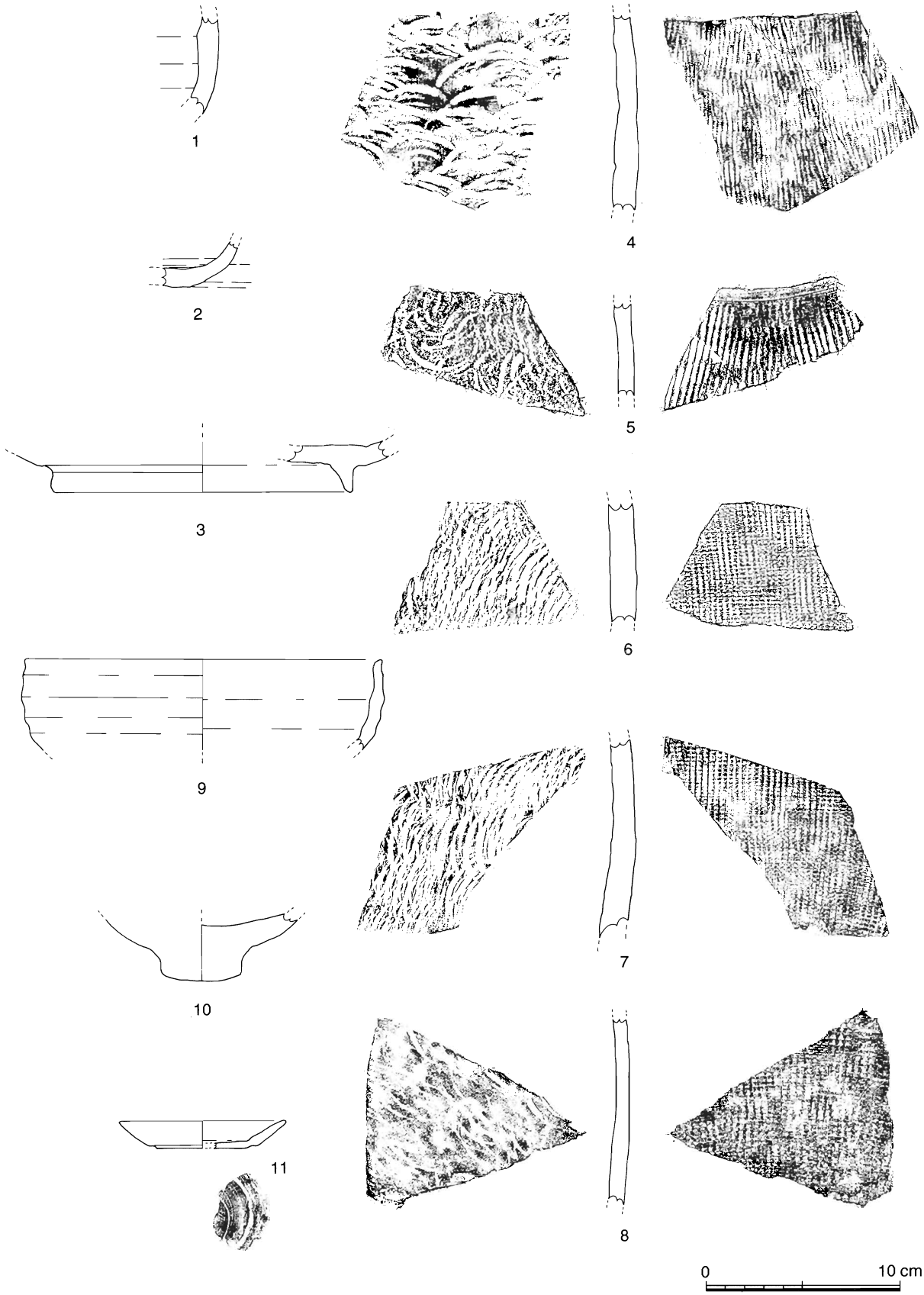
須恵器・土師質土器は黒灰色粘質土層（礫混入）と緑色砂礫層より出土した。須恵器は甕片が5点、坏が2点、高台付坏が1点である。いずれも破片である。

須恵器・坏(1．2)1は外面、内面共に回転ナデであり、はっきりとした稜線は残っていない。2は外面はヘラナデ、内面は体部回転ナデ、底部はナデである。

須恵器・高台付坏(3)は体部内面は回転ナデ、底部外面はナデとなっている。

甕片(4～8)は外面が平行叩きで、内面に円弧状押当具痕がある。

土師質土器(9～11)9は丹塗りの坏である。やや直立気味にたちあがる口縁をもち、内外面共に回転ナデである。10は台付皿である。内外面共に摩滅が激しく調整は不詳だが、脚部に空洞がないのが特徴である。底径は4.0㎝で全体は橙褐色をしている。11は回転糸切り痕をもつ坏の底部片である。外傾する口縁の端部は丸くおさめている。



第８図　出土遺物実測図（須恵器・土師質土器）

② 陶磁器

今回の調査で出土した陶磁器の多くは現代のもので、茶色粘質土層以下、緑色砂礫層、黒灰色粘質土層（礫混入）から出土している。そのうち5点を掲載した。

伊万里系磁器(1・2)1は染付碗で、高台が高く、体部は内湾しながら外上方に立ち上がり口縁部に続いている。19世紀前半頃のものと考えられる。2は染付皿である。『太明年元製』を銘としている。『太明年製』の銘が盛行するのは17世紀後半から18世紀にかけてと考えられるのでそのころのものと思われる。また、高台内には意味不明の変形文字が見られる。

3は肥前系磁器である。体部は内湾しながら外上方へ立ち上がり、口縁部はやや内側へ傾く。口径は7.6㎝で、外面底部中央におよそ直径2㎝の接着部分が露出している。脚部の接合面だと思われる。器種は高坏か。

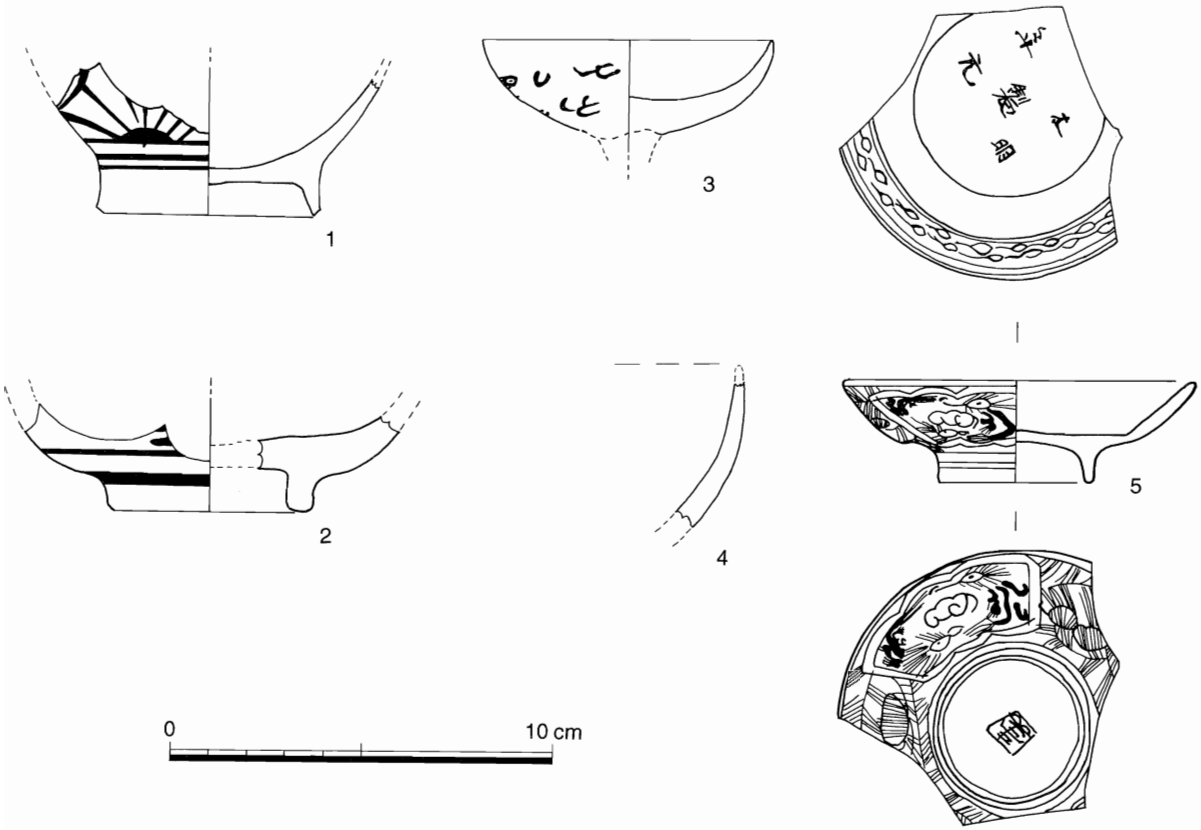
4は内外面に鉄釉のかかった唐津系の碗である。外面体部にはヘラナデが一部にみられる。時期は不明である。

5は陶胎染付の碗である。内外面全体に施釉されている。18世紀後半頃のものと思われる。

参考文献　(6)参考文献(1)に同じ

(7)大橋康二　『肥前陶磁』　考古学ライブラリー55　ニューサイエンス社

(8)佐賀県立九州陶磁文化館　北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁

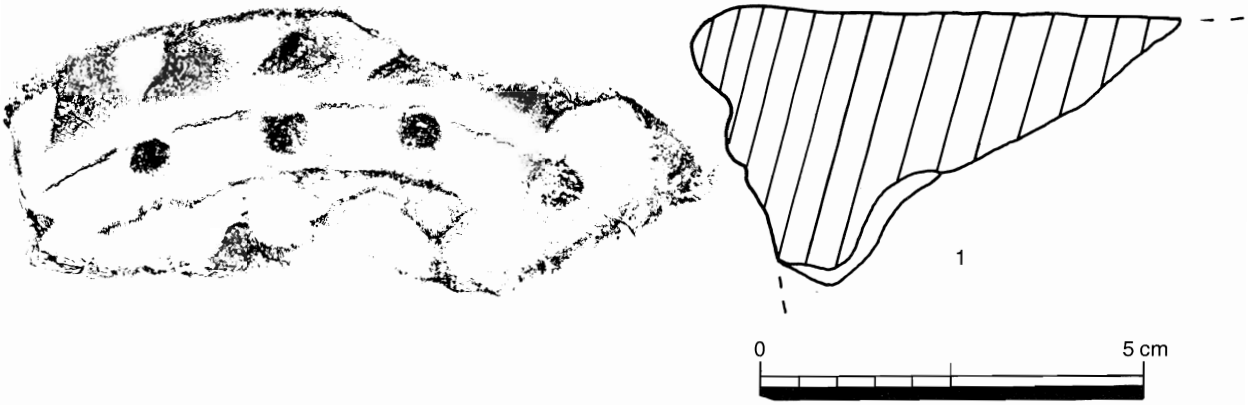


第９図　出土遺物実測図（陶磁器）

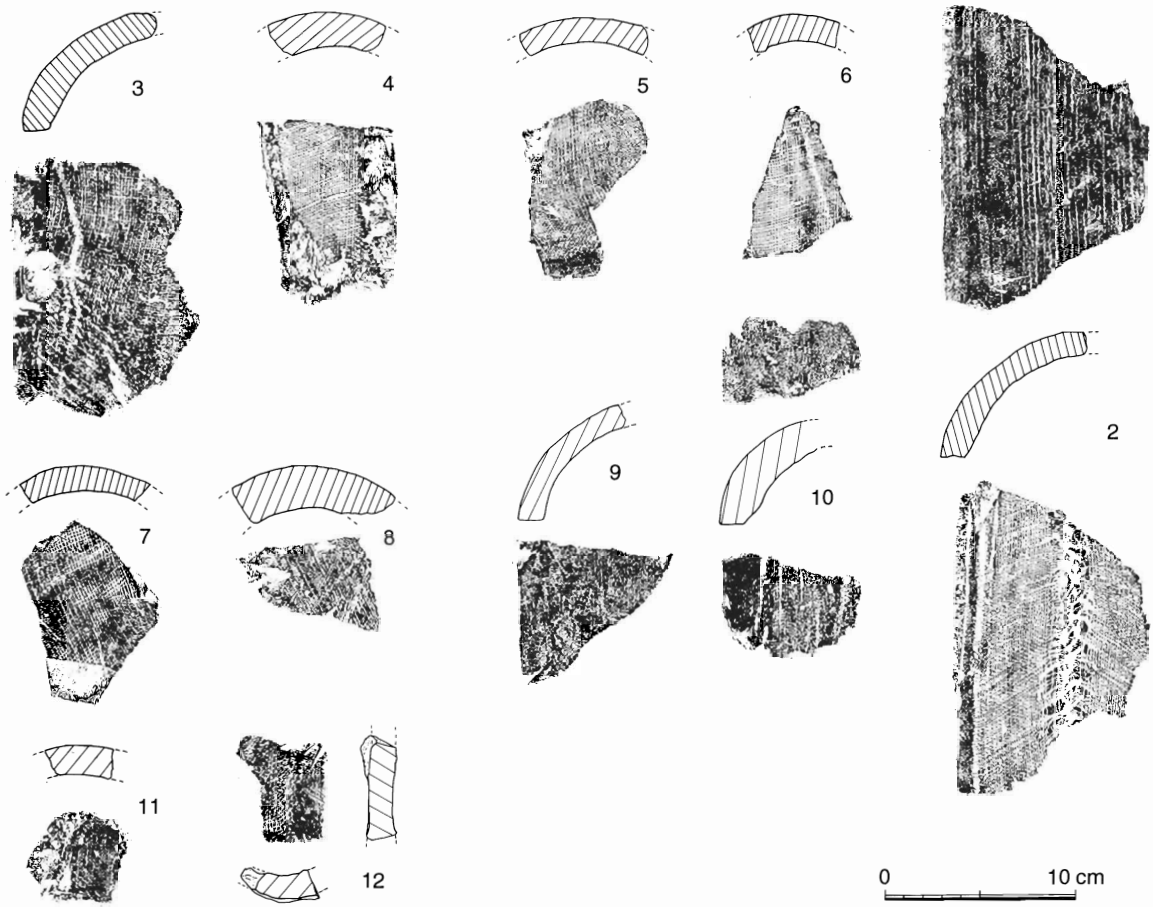
③　瓦

瓦は古瓦から現代瓦に至るまで、表土及び黒灰色粘質土層（礫混入）、緑色砂礫層より出土した。古瓦は49点出土しており、種類は軒丸瓦・丸瓦・平瓦でいずれも破片であった。

(1)は黒灰色粘質土層（礫混入）より出土した四王寺Ⅰ類軒丸瓦である。外区内縁に約1㎝間隔の珠文、外区外縁に面違い鋸歯文を置く。本調査区で出土した軒丸瓦はこの1点のみであった。



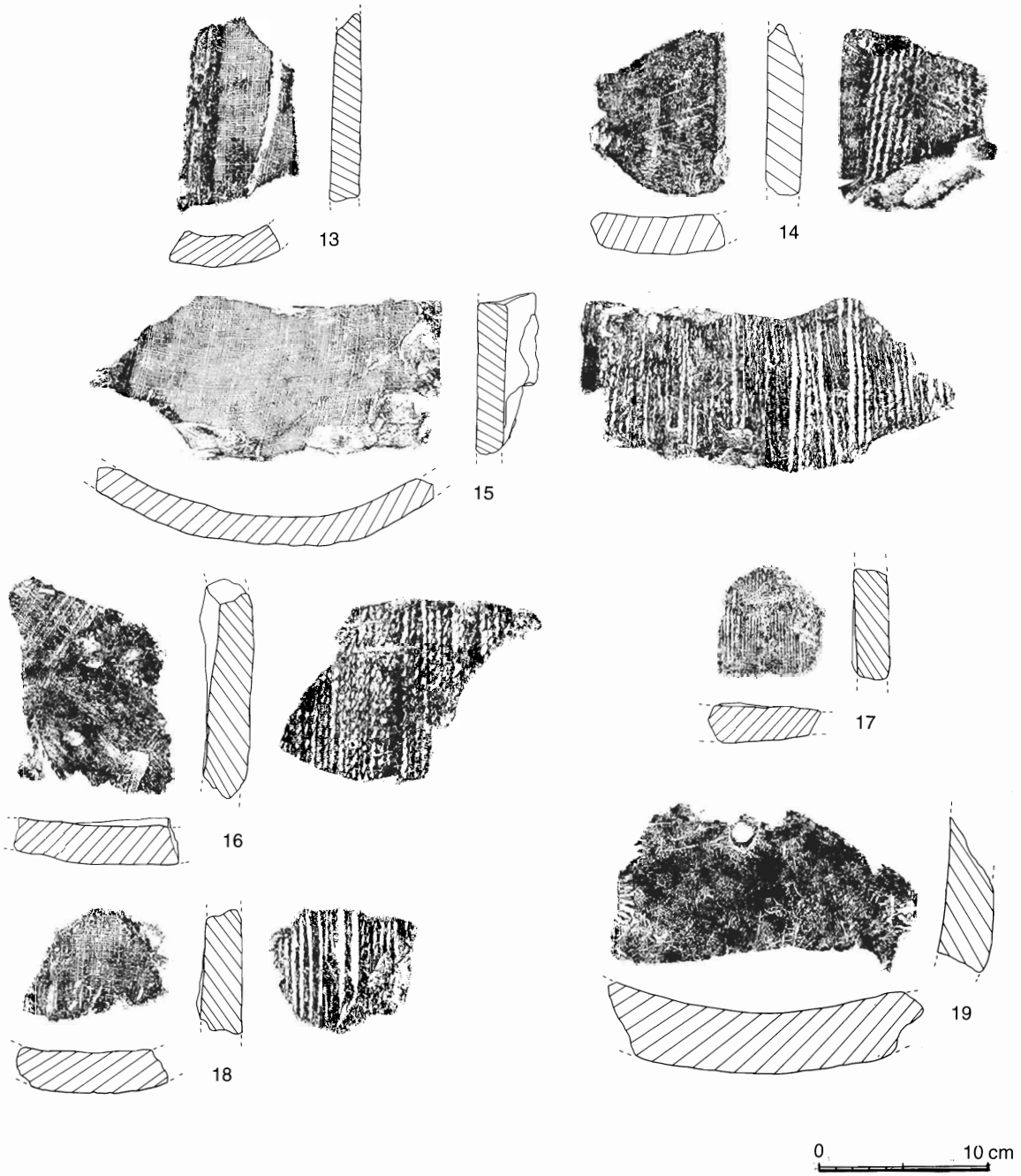
第10図　出土遺物実測図　軒丸瓦



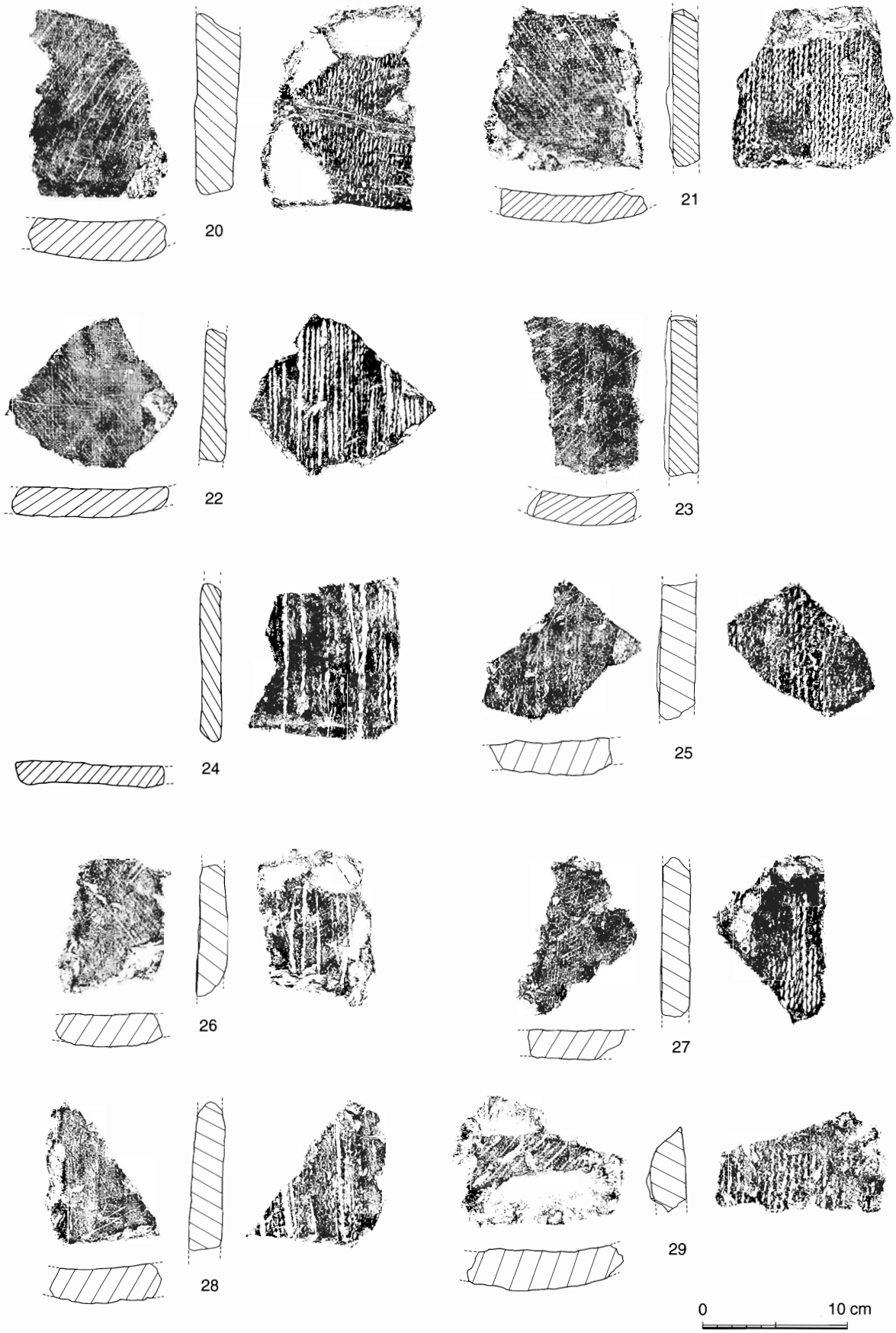
第11図　出土遺物実測図　丸瓦

(2～12)は、丸瓦で全て凹面に布目痕があり、3・5・7は布目と共に一部に糸切り痕が見られる。又、7は玉縁を付している。凸面は縄目叩きの10と摩滅しているもの以外は全てナデ調整である。

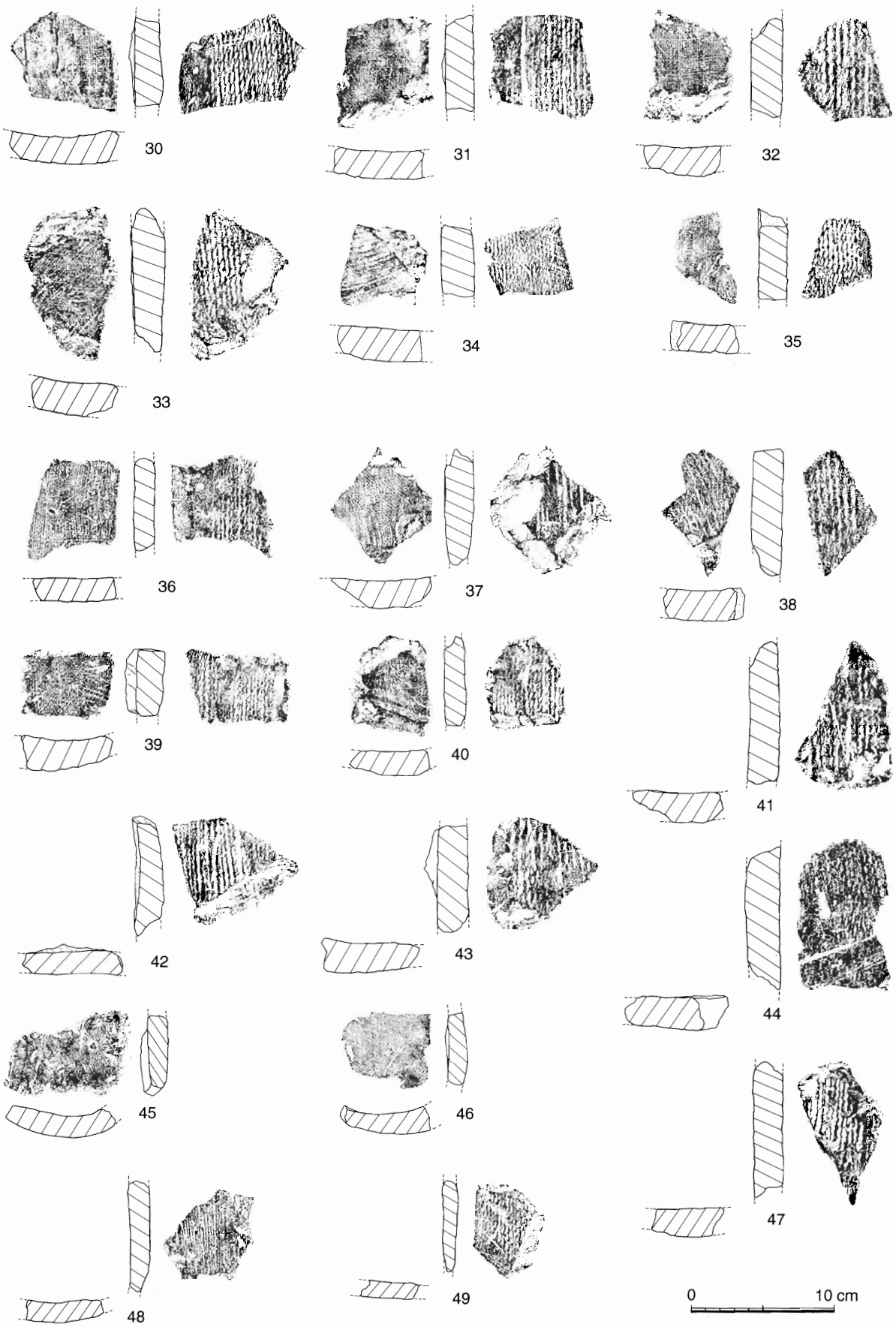
(13～49)は、平瓦でいずれも破片で厚さは2㎝前後である。凹面は摩滅しているものを除いて全てに布目痕がある。そのうち14・16・20・21・22・23・34・38・39・45には糸切り痕が残っている。21のように両面に糸切り痕があるものは、瓦の厚さを分割するときの切断分割痕ではないかと思われる。また、19は布目痕と共に指圧痕も確認された。凸面は48に平行叩きが見られ、それ以外は縄目叩きが見られた。



第12図　出土遺物実測図　平瓦(1)



第13図　出土遺物実測図　平瓦(2)



第14図　出土遺物実測図　平瓦(3)

5．結　　び

今回の調査の結果、遺構としては杭列と石列が確認されたが、いずれも後世のものと考えられ直接寺院に関係する遺構は確認されなかった。

遺物包含層である砂礫層は安山岩を中心としており、茶臼山から流れ込んできたものと考察される。無遺物層である黒色粘質土層は、数千年前に川に流され堆積して地上で土壌化したものと考えられ、その下層においては乃木礫層が存在する可能性がある。

杭列は残存状況の良好だっものから推測すると、黒灰色粘質土層（礫混入）から黒色粘質土層まで打ち込まれていた。石列も黒灰色粘質土層（礫混入）より検出されたが、レンガが意図的に組み込まれていたと考えられることから時期的に寺院跡に関するものとは言い難い。杭列は石列と近い位置から検出されており、方位もほぼ同じになることから共に明治以降の排水路の設備に関係のあるものではないかと考えられる。

今回の調査範囲は、周知の遺跡である四王寺跡のごく一部にすぎず、後世の水路工事に伴う攪乱の可能性もあるため、四王寺跡の寺域内であるのか寺域外であるのか、その判断は明確にできなかった。

出土遺物について見てみると表土以下黒色粘質土層までの包含層（砂礫層）より、須恵器・土師質土器・古瓦、陶磁器や現代に至る瓦が出土した。陶磁器は、18世紀後半から現代にかけての比較的新しいものが出土した。須恵器・土師質土器・古瓦については奈良時代から平安時代中期にかけてのものが大半であった。その中で、新造院創建期の瓦と考えられている四王寺Ⅰ類軒丸瓦が出土していることから、本調査区で遺構は検出されなかったものの、近くには四王寺に関連した遺構が存在すると考えられる。

出土遺物観察表（須恵器・土師質土器）

番　号	種　　類	器　種	法　　量	形態・手法・文様の特徴	出土地点
1	須　恵　器	坏		外面、内面共に回転ナデ。	緑色砂礫層
2	須　恵　器	坏		外面ヘラナデ。内面は体部回転ナデ、底部ナデ。	緑色砂礫層
3	須　恵　器	高台付坏	推定口径：15.4㎝	高台は底部と体部の境に付く。体部内面は回転ナデ。	黒色粘質土層（礫混）
4	須　恵　器	甕		外面は平行叩き。内面は円弧押当具痕あり。	緑色砂礫層
5	須　恵　器	甕		外面は平行叩き。内面は円弧押当具痕あり。	緑色砂礫層
6	須　恵　器	甕		外面は平行叩き。内面は円弧押当具痕あり。	緑色砂礫層
7	須　恵　器	甕		外面は平行叩き。内面は円弧押当具痕あり。	緑色砂礫層
8	須　恵　器	甕		外面は平行叩き。内面は円弧押当具痕あり。	緑色砂礫層
9	土師質土器	坏	推定口径：18.4㎝	口縁はやや直立気味で丹塗りが施してある。内外面共に回転ナデ。	緑色砂礫層
10	土師質土器	台付皿	推定底径：4.0㎝	内部に空洞のない脚を持つ。	黒色粘質土層（礫混）
11	土師質土器	皿	推定口径：8.6㎝ 器　高：1.4㎝	口縁は外傾する。端部を丸くおさめる。 底部外面は回転糸切り。	緑色砂礫層

出土遺物観察表（陶磁器類）

番　号	種　　類	器　種	法　　量	形態・手法・文様の特徴	出土地点
1	磁　器	碗	底径：3.0㎝	伊万里系　釉は透明　染付	黒灰色粘質土層（礫混）
2	磁　器	皿	口径：9.4㎝ 底径：4.2㎝ 器高：2.7㎝	伊万里系　釉は透明　内部底面に『太明年元製』の銘がある。 外部底面に変形字を染付。	緑色砂礫層
3	磁　器	高　坏	口径：7.6㎝	肥前系　釉は透明　外面に脚部接合部がある。染付	黒灰色粘質土層（礫混）
4	陶　器	碗		唐津系　鉄釉がかかる	黒灰色粘質土層（礫混）
5	陶　器	碗	底径：5.4㎝	陶胎染付　内外面全体に施釉　釉は灰白色	緑色砂礫層

出土遺物観察表（瓦類Ⅰ）

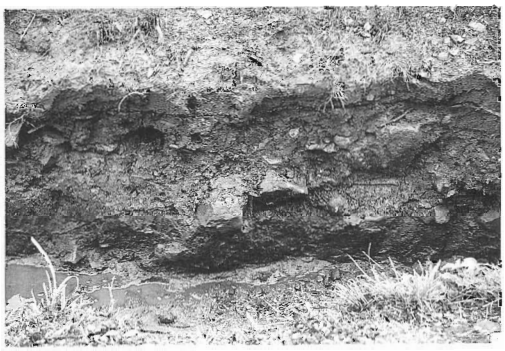
番号	種類	種別	法量	形態・手法の特徴	出土地点
1	瓦	軒丸瓦		四王寺Ⅰ類。外区内縁に珠文を、外区外縁に面違い鋸歯文を置く。	黒灰色粘質土層（礫混）
2	瓦	丸瓦	厚さ 1．5cm	凹面布目痕、凸面ナデ。	黒灰色粘質土層（礫混）
3	瓦	丸瓦	厚さ 1．7cm	凹面布目混及び糸切り痕、凸面ナデ。	緑色砂礫層
4	瓦	丸瓦	厚さ 1．8cm	凹面布目痕、凸面ナデ。	黒灰色粘質土（礫混）
5	瓦	丸瓦	厚さ 1．7cm	凹面布目痕及び糸切り痕、凸面ナデ。	緑色砂礫層
6	瓦	丸瓦	厚さ 1．4cm	凹面布目痕、凸面ナデ。	黒灰色粘質土層（礫混）
7	瓦	丸瓦	厚さ 1．6cm	凹面布目痕及び糸切り痕。凸面摩滅のため不詳。玉縁式	黒灰色粘質土層（礫混）
8	瓦	丸瓦	厚さ 2．3cm	凹面糸切り痕、凸面ナデ。	黒灰色粘質土層（礫混）
9	瓦	丸瓦	厚さ 1．3cm	凹面布目痕、、凸面摩滅のため不詳。	黒灰色粘質土層（礫混）
10	瓦	丸瓦	厚さ 2．1cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
11	瓦	丸瓦	厚さ 1．6cm	凹面布目痕、凸面摩滅にため不詳。	緑色砂礫層
12	瓦	丸瓦	厚さ 1．5cm	凹面布目痕、凸面摩滅のため不詳。	緑色砂礫層
13	瓦	平瓦	厚さ 1．7cm	凹面布目痕、凸面摩滅のため不詳。	黒灰色粘質土層（礫混）
14	瓦	平瓦	厚さ 2．2cm	凹面布目痕及び糸切り痕、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
15	瓦	平瓦	厚さ 1．8cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	黒灰色粘質土層（礫混）
16	瓦	平瓦	厚さ 2．3cm	凹面布目痕及び糸切り痕、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
17	瓦	平瓦	厚さ 2．3cm	凹面布目痕、凸面摩滅のため不詳。	緑色砂礫層
18	瓦	平瓦	厚さ 2．4cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
19	瓦	平瓦	厚さ 3．6cm	凹面布目痕及び指圧痕、凸面摩滅のため不詳。	黒灰色粘質土層（礫混）
20	瓦	平瓦	厚さ 3．0cm	凹面布目痕及び糸切り痕、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
21	瓦	平瓦	厚さ 1．9cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。凹凸面共に糸きり痕。	黒灰色粘質土層（礫混）
22	瓦	平瓦	厚さ 1．8cm	凹面布目痕及び糸切り痕、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
23	瓦	平瓦	厚さ 1．9cm	凹面布目痕及び糸切り痕、凸面摩滅のため不詳。	緑色砂礫層
24	瓦	平瓦	厚さ 1．5cm	凹面砂粒付着、凸面縄目叩き。	黒灰色粘質土層（礫混）
25	瓦	平瓦	厚さ 2．5cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	黒灰色粘質土層（礫混）

出土遺物観察表（瓦類Ⅱ）

番号	種類	種別	法量	形態・手法の特徴	出土地点
26	瓦	平瓦	厚さ 2.2cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
27	瓦	平瓦	厚さ 2.0cm	凹面摩滅のため不詳、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
28	瓦	平瓦	厚さ 2.4cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	黒灰色粘質土層（礫混）
29	瓦	平瓦	厚さ 2.6cm	凹面摩滅のため不詳、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
30	瓦	平瓦	厚さ 2.0cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	黒灰色粘質土層（礫混）
31	瓦	平瓦	厚さ 2.0cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	黒灰色粘質土層（礫混）
32	瓦	平瓦	厚さ 2.1cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
33	瓦	平瓦	厚さ 2.3cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
34	瓦	平瓦	厚さ 2.3cm	凹面糸切り痕、凸面摩滅のため不詳。	黒灰色粘質土（礫混）
35	瓦	平瓦	厚さ 2.0cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
36	瓦	平瓦	厚さ 1.6cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	黒灰色粘質土（礫混）
37	瓦	平瓦	厚さ 2.0cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
38	瓦	平瓦	厚さ 2.1cm	凹面布目痕（糸切り痕）、凸面縄目叩き。	黒灰色粘質土（礫混）
39	瓦	平瓦	厚さ 2.3cm	凹面布目痕（糸切り痕）、凸面縄目叩き。	黒灰色粘質土（礫混）
40	瓦	平瓦	厚さ 1.6cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
41	瓦	平瓦	厚さ 2.1cm	凹面摩滅のため不詳。凸面縄目叩き。	黒灰色粘質土（礫混）
42	瓦	平瓦	厚さ 1.7cm	凹面布目痕、凸面縄目叩き。	黒灰色粘質土（礫混）
43	瓦	平瓦	厚さ 2.1cm	凹面摩滅のため不詳、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層
44	瓦	平瓦	厚さ 2.4cm	凹面摩滅のため不詳。凸面縄目叩き。（糸切り痕）	緑色砂礫層
45	瓦	平瓦	厚さ 1.5cm	凹面糸きり痕、凸面摩滅のため不詳。	緑色砂礫層
46	瓦	平瓦	厚さ 1.7cm	凹面布目痕、凸面摩滅のため不詳。	黒灰色粘質土（礫混）
47	瓦	平瓦	厚さ 2.1cm	凹面摩滅のため不詳、凸面縄目叩き。	黒灰色粘質土（礫混）
48	瓦	平瓦	厚さ 1.4cm	凹面摩滅のため不詳、凸面平行叩き。	緑色砂礫層
49	瓦	平瓦	厚さ 1.1cm	凹面摩滅のため不詳、凸面縄目叩き。	緑色砂礫層

図　　版

A区調査前（北より）



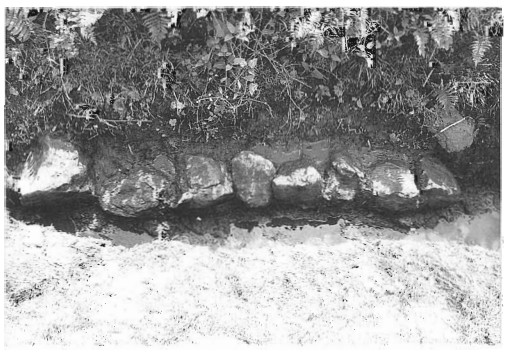
A区東壁石列検出状況（西より）

A区土層堆積状況（東より）

A区横木検出状況（南より）

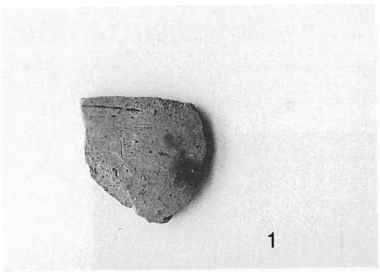
B区調査前全景（南より）

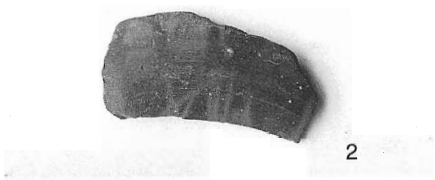
B区東壁石列検出状況（西より）

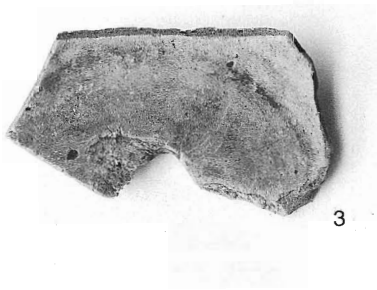


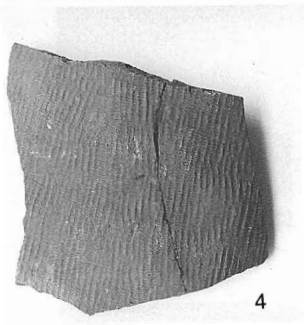
B区土層堆積状況（東より）

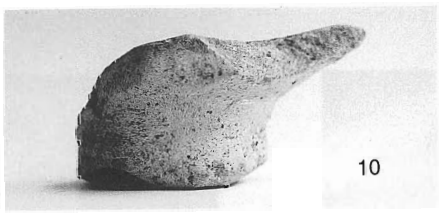
B区東壁石列検出状況（南より）

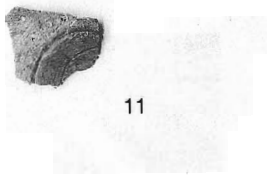




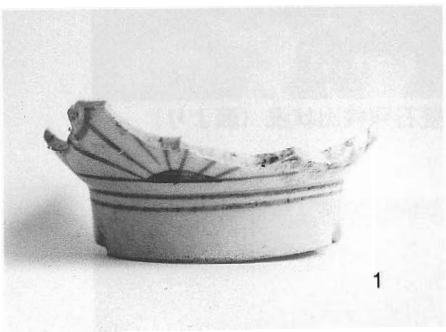


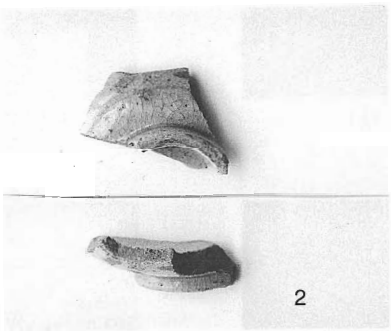


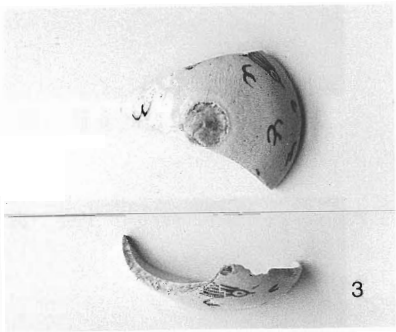


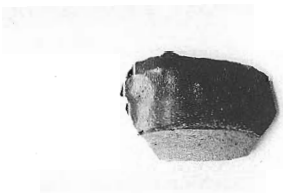


須恵器・土師質土器

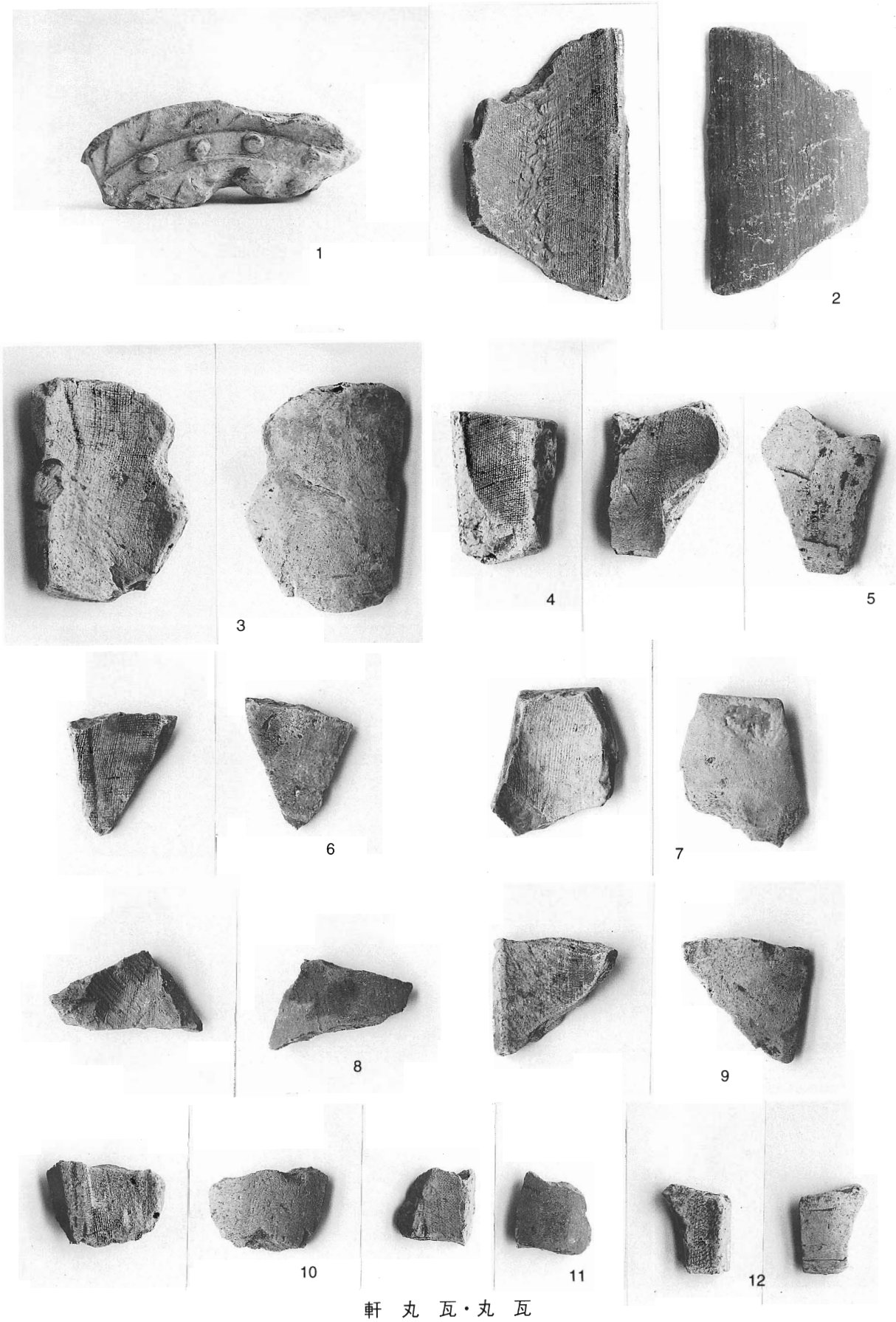




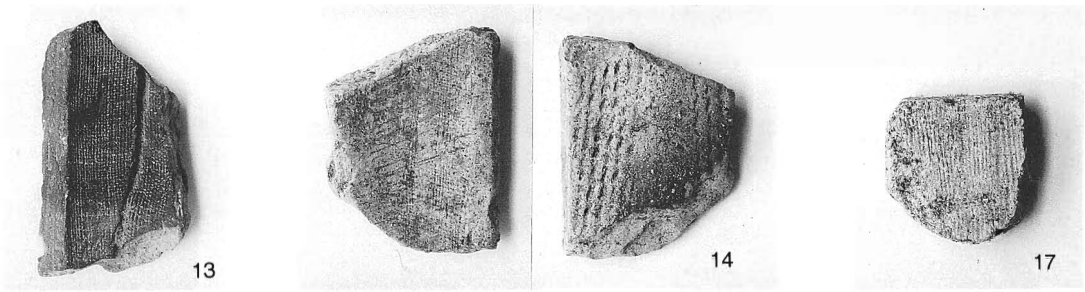


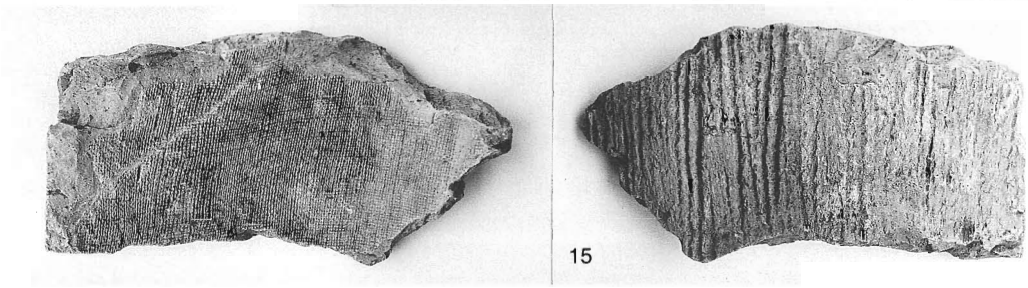


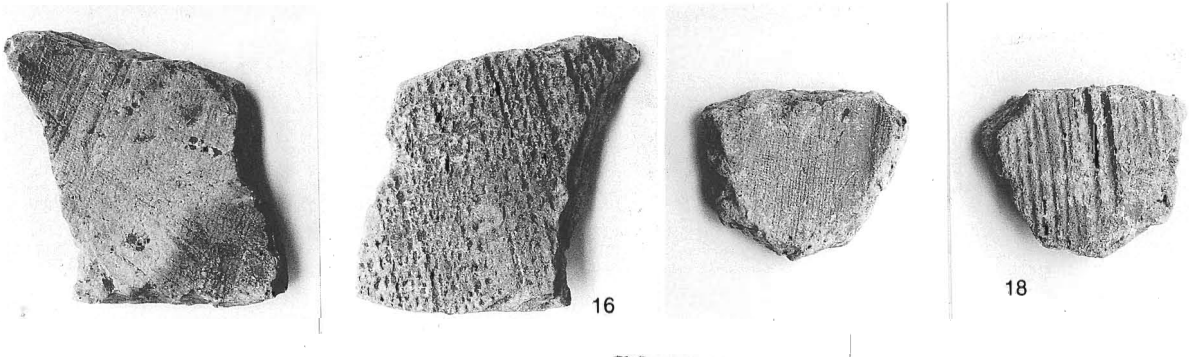
陶　磁　器

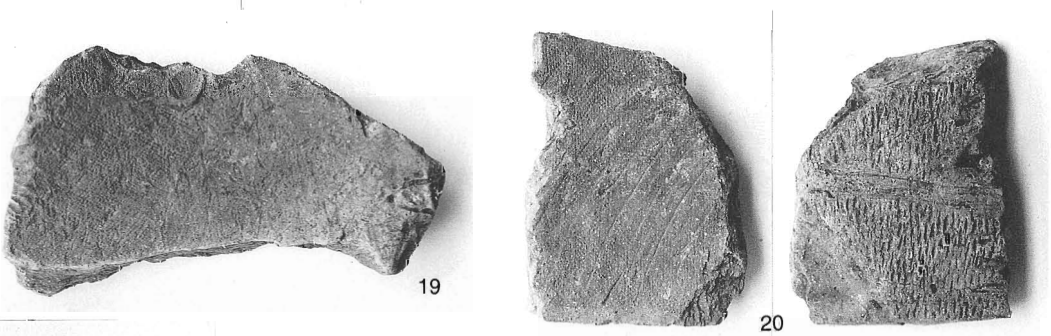


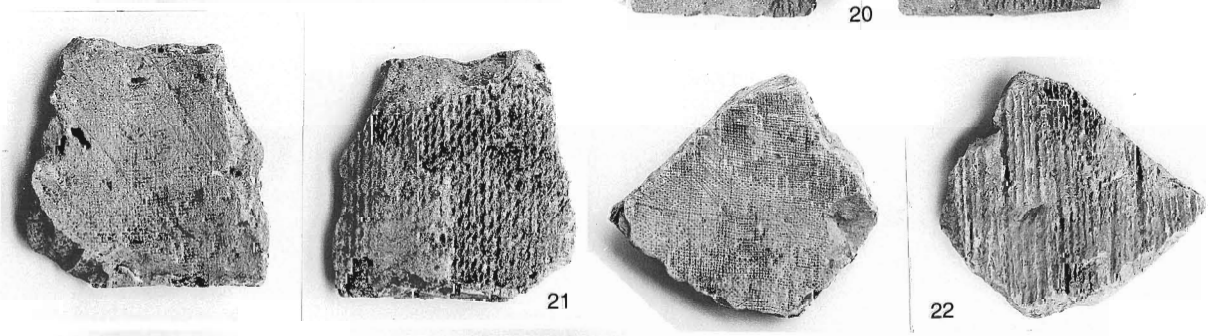
軒　丸　瓦・丸　瓦

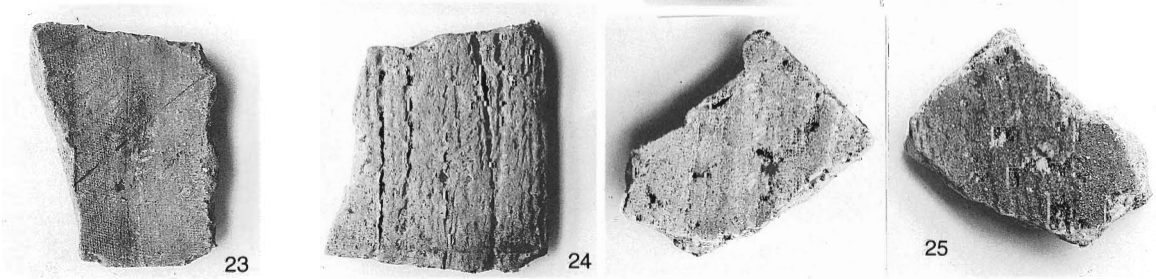






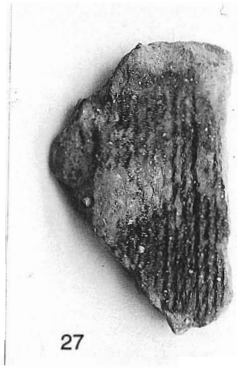




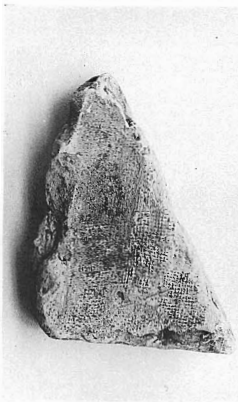


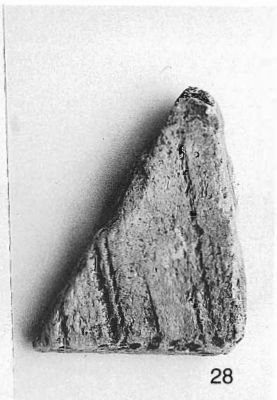
平　瓦

26

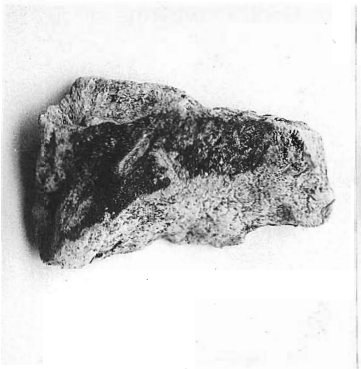


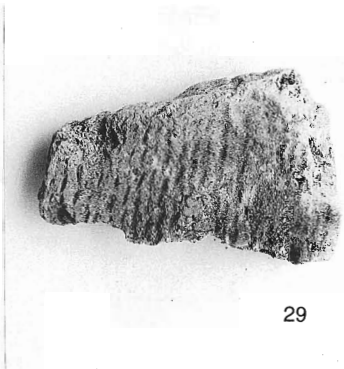
27



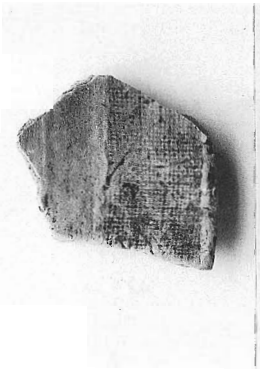


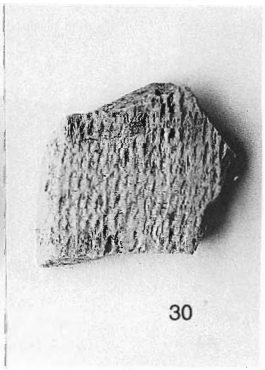
28





29

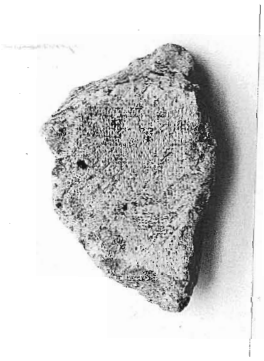




30

31

32

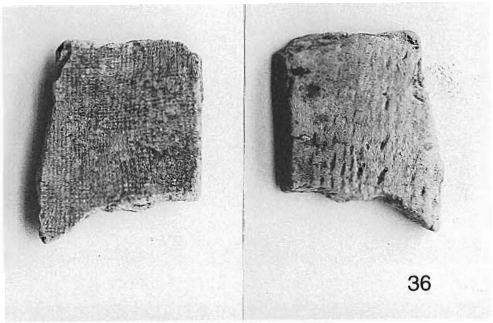


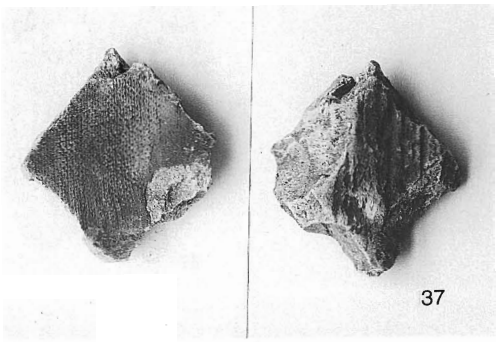
33

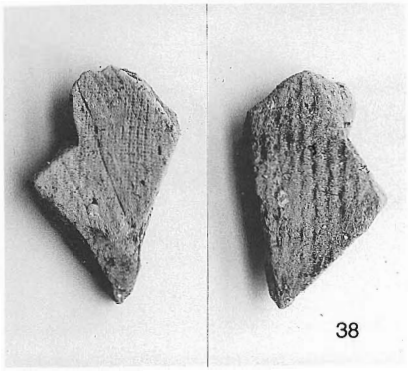
34

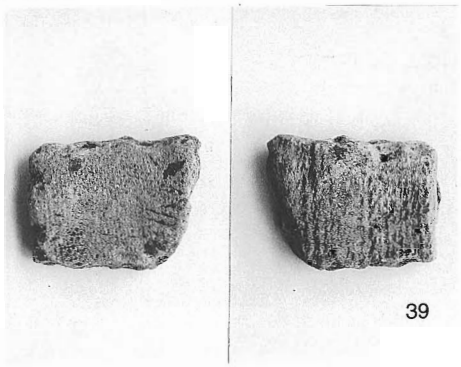
35

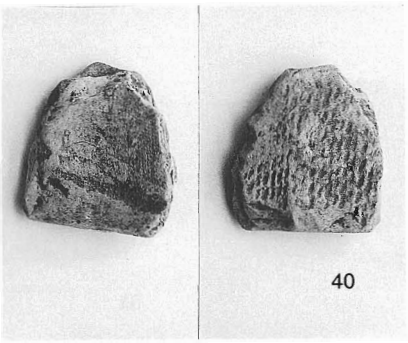
平　　瓦

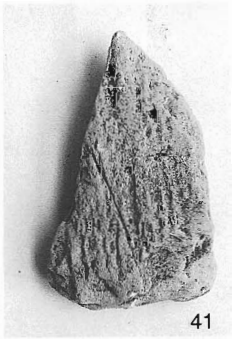

36

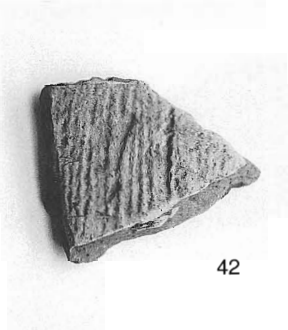

37


38


39


40


41

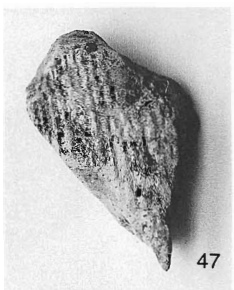

42

43

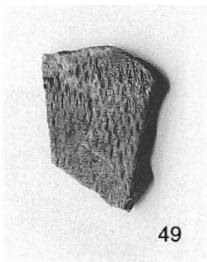
44

45

46


47

48


49

平　　瓦

四王寺発掘調査報告書

1996年3月

発　行　松　江　市　教　育　委　員　会
㈶松江市教育文化振興事業団

印　刷　有限会社　高浜印刷所
松江市北掘町8